

福島県 教育新聞

発行人 福島県教職員組合
発行所 福島市上浜町10-38 電話024-522-6141
〔定価一部 20円〕
編集・責任者 瀬戸 禎子
e-mail: ftukyoso@poplar.ocn.ne.jp
http://www.f-t-u.or.jp
(この購読料は組合費に含まれています。)

ろうぎんのキャッシュカードなら
ATMお引き出し手数料が
実質 0円
ご利用手数料はいったんご負担いた
たく場合がありますが、即時キャ
ッシュバックいたします。
東北労働金庫

県教委に現場の実態を訴える! 専門部交渉実施!!

12月27日(火)、県庁西庁舎教育委員室にて県内各地から結集したみなさんにより、専門部交渉が行われました。

青年部

- ・初任者研修のレポート等の負担とメンター方式による学校の負担増の現状。初任者と子どもが一緒にいられる時間の確保を求めた。
- ・人生設計の見通しを持つためにも、人事異動3管内以上の異動基準の緩和を要求。他県の状況を伝える。



栄養教職員部

- ・新卒で栄養教諭を採用することについて、他県の状況を伝え、検討を要求。
- ・栄養職員採用受験年齢の引上げ。
- ・食育に関わる栄養教諭、栄養職員の多忙化の現状。
- ・栄養教職員の定年前再任用短時間勤務の職務内容を明確にするよう求めた。



障がい児教育部

- ・8人在籍している自閉症・情緒障がい学級への非常勤講師の完全配置を要求。
- ・本人・保護者の希望に沿って、支援学級・通級指導教室を設置すること、通級指導教室への送迎等で地域間格差が出ないように要求。



女性部・養護教員部

- ・22年1月1日から制度の開始となった出生サポート休暇(不妊治療休暇)の日数拡大。
- ・家族の看護・介護を含めた「家族看護休暇(仮称)」の新設。
- ・校務支援システム導入について、養護教員が有効活用できる体制の整備。
- ・定年前再任用短時間勤務制の導入にあたって、養護教員の職務内容の明確化。



事務職員部

- ・県の行政職と学校事務職員の賃金格差についての改善要求。
- ・学校事務の処遇改善と共同連携の課題から、市町村によっては2校でも1グループとして認めるよう要求。
- ・事務職員の複数配置基準の弾力的な運用。
- ・履歴書等の電算化による簡略化。
- ・新採用事務職員に対する職能研修のさらなる充実を要求。



新春座談会

青年と語る！「やっぱり組合って大事だね」

県教組の未来を担う青年部員と、お隣の栃木県の教職員組合〔栃木教育ネットワークユニオン（以下栃教ネット）〕の青年部長との座談会を行いました。若い教職員の実態や組合への関わり、今後の目標など青年の視点でお話いただきました。コーディネーターは吉田書記次長が務めました。



青年部長 遠藤 聖典さん
(前列中央・教員)
常任委員 管家 柚香さん
(前列右・養護教員)
栃教ネット青年部長 印南 芳彦さん
(前列左・教員)
前青年部長 遠藤美菜子さん
(後列左・栄養職員)
書記次長 吉田 純一さん (後列右)

組合加入や青年部活動に関わったきっかけは？

- (遠藤美) 初任研の後のお食事会で加入。民間に勤めているとき、労働組合の運動によってボーナスが上がることを実感した。教職員は結構守られているが、運動しないとボーナスも上がらない。運動を起こすことで(労働)条件が良くなっていく。労働組合の存在は大切だと思った。
- (遠藤聖) 東京で勤めていた頃は、組合に加入していなかった。互助会のイベントなどに参加した時、先輩から組合には誘われた。必要性は感じていたが加入まで至らなかった。福島に来て、支部の歓迎集會に職場の先輩と一緒に参加して加入を決めた。
- (印南) 臨採の時に受けた採用試験学習会がきっかけ。加入を勧めるときは、日教組の組合ということ伝えてる。採用されてから組織づくりに関わるようになり、青年部長になった。栃教ネットでは、職場の悩みを話せる場を作りたい。

青年部活動で大切にしたいことは？

- (遠藤聖) 加入して良かったと思えるような場を提供したい。せっかく組合に入ってくれたので。
- (管家) 以前所属した支部ではよく集まって学習した。
- (遠藤美) 青年部長だったとき、コロナ禍だったが、オンラインでもつながって話せる場があった。青年が話したいという気持ちで実現した行事もある。制約があってもやり方を変えて交流することはできる。
- (印南) 栃教ネットでは、青年部の合宿を年1回はやっている。採用試験対策講座でつながった人も来てくれた。少人数だからできることを考え、交流する大切さを伝えたい。福島の行事に未加入者が来ていたのは驚き。参加しやすいのが良い。

(遠藤聖) 新しい生活様式の所為で人との関わりが薄くなっている。学習する内容は多様化してきているが、「関わること」「交流」することはずっと求められている。

(吉田) 働くものとしての学習は大事。学習と交流は、青年部運動の両輪。同期で集まる機会もないので、「お茶していこう」「一緒に酒飲みしよう」などが無い状況。そもそも交流することに価値を見いだしていない若者も。「面倒くさい」と感じるのかも。

(遠藤聖) 大学のゼミの教授が「若い人が打たれ弱くなっている。同じことを言っても、響き具合が違って、かえって離れていってしまう。」と話していた。価値観が変わってきている。

(吉田) 世代間のギャップは青年層の中にもある。無理に人と関わらなくても困らない若者もいる。

(管家) 若い人の困り感が低いのではないかな。

(印南) 採用試験お疲れ様会は、やるようにしている。2次試験の後の報告会では、来年度に向けた情報共有をしているので、メリットはあると思う。青年層は、組合そのものの理解が低い。財政は厳しいが採用試験学習会の講師を頼んでいる。日教組本部からの財政支援を受けている。

(吉田) 日教組でも、栃教ネットの取り組みを全国にアピールしている。

(遠藤聖) 「栃教ネット」の名前がもっと広がっていけばいい。もう少し組織が強くなれば「すごく良い組織だ」と理解されていく。

(吉田) 福島県教組で昨年実施した青年部アンケートは、自分の声を発信することで組合を意識するきっかけとなったのではないかな。寄せられた内容の中には切実な声も。オルグでも「『しんどい』『ちょっとおかしいのでは?』』と思った時は、同僚や組合に話して良いのですよ。」と伝えている。

職員の退勤時刻から見えてくる学校現場の課題について、考えていることを教えてください。

- (管家) 今の時期だと退勤は17時半。暗くなるし、凍るから(会津なので)。
- (遠藤聖) 19時頃が多いです。
- (印南) 18時半から19時くらいかな。私の学校では19時には、半分の職員は退勤している。
- (吉田) 超過勤務が当たり前になっている。文科省が掲げる「月45時間を超えない」を達成するのは難しい。
- (遠藤聖) 朝の時間もある。超過勤務は、ほぼ事務作業でおわってしまう。先日のアンケートでも「子どものためになることをやりたい」という答えが多かったが、子どものための時間を割くのは難しい。優先順位が低くなってしまう。そうすると「なぜ教員をやっているの?」と思ってしまう。
- (吉田) 管理職がやらなくても良いと言っても、教職員側がやってしまう。本当に必要かどうかを見極める、教職員の意識改革も必要なのではないかな。
- (遠藤美) **仕事量が多くて残業せざるを得ないというところもある一方で、長時間労働が美德という意識から抜け出せないところもある。**定時で帰ってもなんとかなるのに、後のことを気にしすぎて、その日やらなくてもよい仕事までしてしまうことがある。
- (管家) 独身の頃は、残って仕事をするのが多かった。子どもがいると、家に帰ってからのことがいろいろあるので、**タイムスケジュールを考え仕事をしている。**年度初めも、明日やることをリストアップして見通しを持って仕事をしている。
- (遠藤聖) ちゃんと評価できる職場じゃないといけなと思う。**独身だから早く帰っちゃいけないとか、管理職が「遅くまでがんばっている」から「偉い」という評価をするのは絶対おかしいと思うので、正当な評価ができる職場が健全。**仕事の内容をしっかりと見てほしい。「遅くまで残って仕事をする」が「偉い」という意識は払拭したい。
- (印南) 勤務する市で授業公開をしている。一人一授業を公開するという内容。学校外からも参観者が来る。授業準備や環境整備など時間がかかる。負担が大きい。授業だけでなく、教室環境の整備も必要となる。時間の無駄だと思う。
- (遠藤聖) 必要感があるものであれば仕方ないが、義

務でやらされるのは、ちょっと違う感じ。先生という仕事の特徴で一人一人の頑張りで成り立っていることが多い。若手には、周りに「助けて」と言うことより、自己解決やスキルアップすることが求められている。それが、その職場にとっての強みだと思われる。管理職には、手がかからないことが歓迎されている。

(管家) 新卒ですぐに現場に出て、自分ができないことに対してへこんでしまう若者が多い。自分に求められるレベルと自分が今持っているレベルのギャップが大きすぎる。現場に出されて、そのギャップを受け入れられず崩れてしまう。

(吉田) 初任者の自己評価が低い。経験が無いのだから、できなくて当たり前なのに、「自分はできない」と思ってしまう。初任者でも生き生き仕事をしている人は、周りの支えがある。職場で助け合っている分会で初任者の加入があった。組合の考え方が浸透している。

(遠藤聖) 「できなくて当たり前だよ」と言ってもらえる環境は大事。どんな年齢になっても、分からないこと分からないのだから。

(吉田) 教職員はがんばりすぎている。「やらなきゃ」という使命感が高い。

(遠藤聖) 「高い使命感」という言葉をよく見聞きする。採用試験の募集要項にも「高い使命感・倫理観が求められている」と明記。私たちはスーパーマンじゃないので、すべて捧げて仕事をすることがよいことではない。働き方に対する意識を見直していくためにも組合は大切。

県教研からつながりを持つことができた、栃教ネットの印南さんをお迎えし、終始和やかな雰囲気での座談会でした。若者の視点で、職場が抱える課題や組合の大切さを話していただきました。働き方改革も若い世代の仲間が中心となり、進めていこうというパワーを感じました。

みなさん、ありがとうございました。



は学校で! Monster 絵



2023原発のない福島を! 県民大集会

と き: 2023年3月19日(日) 18:00開会
と ころ: パルせいざか



栄養教職員部学習会

と き: 2月18日(土) 10:00~12:00
と ころ: 郡山教組会館

青年部学習会

と き: 2月23日(木・祝) 13:00~15:30
と ころ: 郡山教組会館

※詳細は同封のチラシをご覧ください!

みんなのひろば

~伊達市梁川 玉泉堂のチョコバナナ~



いつでもお祭り気分を味わえるチョコバナナがあると聞いて行ってきました! ボリュームたっぷりですが、祭りのチョコよりも甘さ控えめで、おいしく食べれちゃいます!

(岩瀬支部 Yさん)

今回のテーマは「doing being」

ノスタルジー

シンガーソングライターあいみよんは、ふるさと甲子園でライブをやるのがデビューのころからの夢だった。デビューして六年、二〇二二年十一月ついに実現。あいみよんは特別な想いを持ってこのライブに臨んだ。二十歳でふるさとを飛び出し、ひたすら歌手になる夢を追いかけてきた。そして辿り着いた甲子園。自分の選択が間違っていないと思いたい。このライブは夢の答え合わせなのだ。あいみよんは言う。

あいみよんは子どものころから勉強が苦手だった。でも、歌手になりたいという胸に秘めた夢があった。高校生の時、それを先生や友だちに話すと「そんなこと考えんないから勉強しろ」「そんなこと無理やろ」と笑われた。周りの人はあいみよんの夢を応援してはくれなかった。そして高校2年生の時学校を辞めた。歌手になるために...ではないらしい。あいみよんは「勉強のことばかり言われるのがしんどかったのかも...」と振り返る。夢を否定され「自分って何にもできない人だ。やっぱり」とも思ったという。でも歌が好きだった。十八歳の時に始めた路上ライブ。最初は誰も足を止める人はいなかった。それでも曲をつくり歌い続けた。笑われてもひたむきに言葉をつくり続けた。そして辿り着いた甲子園。

あいみよんはこの地元甲子園でのライブで自分の歩みを確かめるためにどうしても歌いたい曲があった。それはTower of The Sun. この曲にはこんな意味の表現がある。

自分は自分、自分を信じて生きたい決意/学校で同級生や先生から受けた自分の夢への冷笑やできないことを強調されることへの哀情/それに対して自分をまるごとありのまま受け入れてくれた両親の愛情

あいみよんの歩みをたどりながらぼくは思う。学校っていったい何のためにあるのだろう? できない・できないを評価するため?

できないことがあるとそれはダメなの? 二〇二三年新しい年を迎えた。原点に戻って「なぜ教師になりたいと思ったのか」をもう一度見つめ直したい。そこにこたえがあるはずだ。 あいみよんは、夢の答え合わせは? の問いに「夢を追い続けて来たことは間違ってたかった。幸せな時間だった。楽しかった。」とこたえた。

誰の夢も応援したい。そしてぼくも夢を追い続けていたい。

(K・I)

